

図書館だより

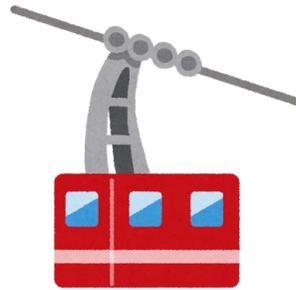


No. 6

平成 28 年 10 月 31 日発行

2年生のみなさん修学旅行からおかえりなさい。オーストラリアでの日々は、充実したものになったでしょうか。どんな思い出が出来たかぜひ聞かせてほしいと思います。また修学旅行を機に海外や語学に興味を持った人は、その興味を深めていきましょう。図書館もまた活用してください。

今年は10月に入っても暑さが続きましたが、ようやく秋が深まりつつあります。これから紅葉も見ごろを迎え、あちこちに出かけたくなる季節です。みなさん今年はどこへ紅葉を見に行きたいですか。最近はライトアップされた紅葉を楽しめる場所もあちこちにありますので、屋間とは違う景色の広がる夜の紅葉も楽しみたいところ。また、箱根のロープウェイが全面運行開始しましたので、ちょっと足を延ばして箱根に紅葉を楽しみに出かけるのもいいですね。



もう一度オーストラリアに行くなら*

297-オ 『オーストラリアで大の字』 小栗 左多里/トニー・スロ || 著 ヴィレッジブックス

今回の修学旅行でみなさんが訪れたのはゴールド・コーストとブリスベンでしたが、日本の約20倍もの大きさのオーストラリアにはまだまだ見どころ、魅力がたくさんです！ゴールド・コースト、ブリスベンの他、ケアンズ、シドニー、メルボルンとオーストラリアを縦断する冒険コミックエッセイです。ケアンズの海でサンゴ礁に見とれながらダイビング、ゴールド・コーストでラクダレースを観戦、シドニーのハーバーブリッジでブリッジクライム、メルボルンのパフィン・ビリー鉄道で運転士のお手伝い体験など、各地で様々な体験を楽しんでいる様子が綴られています。「次はこんな体験してみたい」というのがきっと見つかるはず。

ぶらり箱根の旅*

291-コ 『ココミル 箱根』 JTBパブリッシング

新宿から小田急線のロマンスカーに乗れば、1時間半で到着してしまう箱根。見て楽しい、食べておいしい、くつろいで癒される、そんな観光スポットが充実して揃っています。その箱根のイチオシスポットを女子のためのおしゃれ旅を提案するガイドブック『ココミル』で覗いてみましょう。

ここは押さえておきたいという名所はもちろん、知っていて役立つ箱根湯本の駅ナカグルメや自分の分もちゃっかり買ってしまいたい可愛いお土産もばっちり紹介されています。ページのレイアウトも女子好みに仕上がっていて読んでいただけで楽しいです。行きたいところがありすぎて、1日じゃ回れない！という人は家族を誘って一泊旅行を企画してみるのもいいですね。

本の世界を楽しむおはなし会

図書委員会と有志が行っているおはなし会。桔梗祭でも、発表を行っており、その際には卒業生や観客のみなさんにも参加してもらいながら、盛り上がっています。自分で本を読むのとはまた違った本の楽しみ方ができます。和歌や戯曲、英語での朗読など、普段は読まないジャンルの本にも興味を持ってもらえたら嬉しいです。今回は『クリスマスまで待てない！』というテーマで、クリスマスに関連する作品を揃えました。ちょっと早いクリスマスと一緒に楽しみませんか。

おはなし会

日時:11月17日(木) 15:15~16:15(予定)

場所:秋草記念館 1階 図書館

作品:「バムとケロのおかいもの」「賢者の贈り物」「テンペスト」



芸術の秋の映写会は…

今回の映写会では、宝塚劇団の『1789 -バステューユの恋人たち-』を上映します。革命勃発のパリに生きた若者たちの、激しく熱い愛と理想に満ちた青春を描いた本作は、宝塚の月組により上演されました。時代は「ベルサイユのバラ」と同じフランス革命当時ですが、貴族のオスカル目線で描かれたものとは異なり、革命家の目線でフランス革命が描かれています。舞台装置も立派で、いつもは華やかな衣装も汚しを入れたリアルなもの、曲もロック調が多くなっています。気軽に楽しみながら歴史の勉強にもなるので、ぜひ見に来てください。

映写会

日時:11月24日(木) 15:15~18:15(予定)

場所:秋草記念館 2階 桔梗ホール

作品:宝塚歌劇団『1789 -バステューユの恋人たち-』



775-ナ 『なぜ宝塚歌劇の男役はカッコイイのか』 中本千晶 || 著 東京堂出版

2014年に創立100周年を迎えた宝塚歌劇団。世界的にみてもめずらしい、男役も女性が演じる女性だけの劇団です。老若男女誰もが楽しめる国民劇を目指して創設されたこの劇団の舞台上に、出演できるのは宝塚音楽学校の卒業生だけです。それだけに団員は伝統を受け継ぎ、研究を重ねた演技の細部に至るまでのこだわりを深めています。特に男役は「男役10年」と言われるそうで、一朝一夕に極められるものではないようです。そんな男役さんのカッコイイ秘密を解き明かしてくれるのが、この本です。見ればきっとファンになってしまう宝塚。その理由とちょっとした歴史をこの本で学んでから、映写会を見てみませんか？そしていつの日か、本物の舞台のトキメキしましょう。

🍎 読書週間が始まりました 🍎

27日から読書週間が始まりました。1947年に始まった読書週間は今年で70回目を迎えます。そんな記念すべき今回の読書週間の標語は「いざ、読書」です。「いざ」という一言があると、なんだかとても読書に気合いが入る感じがしますね。みなさんはどんな本を読む時に、「いざ！」と気合いが入るでしょうか。私が気合いを入れるのはシリーズものを読む時です。せっかく読むのだからどっぷり世界に入って一気に読みたいと思うと、どのタイミングで読むのがベストかなと悩んでしまいます。そうやって悩む時間も含めて、読書って楽しいなと多くの本好きが思っているはず。普段、あまり本を読まない人も今年の読書週間は「いざ！」という気持ちで読書を試してみませんか。読書にハマる一冊に出会えるかもしれませんよ。そんな出会いに期待して、みなさんに「いざ、〇〇」な本を紹介します。



いざ 詩歌*

911.3-サ 『Santoka』 種田 山頭火 || 著 ピエ・ブックス

明治から昭和にかけての俳人 種田山頭火。五七五の定型に縛られずに作る自由律俳句の代表として知られています。みなさんはこの山頭火の俳句を目にしたことはありますか。『まっすぐな道でさみしい』、『さくらさくらさくらさくらさくらさくら』、『ひらひら蝶々はうたへない』など、一度読んだだけで記憶に刻まれてしまう印象深く、趣のある句を多く詠んでいます。俳句が好きだ、俳句に興味がある、という人でなくても触れやすい俳人ではないかなと思います。その山頭火の句をじっくり味わうのにおすすめなのがこの本です。少々大きくて重い本なのですが、中身はとっても素敵です。一句一句が英文対訳つきで載っており、句の風景を連想させる写真が合間合間に挟まれ、山頭火の世界に浸りながら俳句を楽しむことができます。

いざ、詩歌*

B911.5-ナ 『汚れつちまつた悲しみに……』 中原中也 || 著 集英社

中原中也といえば、美男子ということでも有名な昭和の詩人です。代表作には、『汚れつちまつた悲しみに……』をまっ先に思い浮かべるとい人が多いかと思いますが、わずか30年という短い人生の中で350篇以上の詩を残しています。

『汚れつちまつた悲しみに……』もそうですが、「松の木に風が吹き、踏む砂利の音は寂しかった。暖い風が私の額を洗ひ 思いをはるかに、なつかしかった(『心象』より)」、「ほがらかとは、恐らくは、悲しい時には悲しいだけ 悲しんでられることでせう? (『酒場にて』より)」など、中也の詩を読んでいると胸に切なさがよぎります。彼がどんな思いの中で、その詩を書いたのかを1つ1つ想像しながら秋の日に中也の詩を楽しんでください。

いざ、長編 (上下巻571 ページ) *

913.6-テ 『歓喜の仔』 天童 荒太 || 著 幻冬舎

過酷な環境での生活を強いられた三人の兄弟。長男の誠は17歳、二男の正二は小学6年生、末っ子の香はまだ幼稚園児だ。父は失踪し、母は寝たきりの状態が続いている。家族に降りかかった悲劇により、誠は音楽を失った。正二は色彩を失った。香は嗅覚を失った。そして、本当にギリギリで危うい生活の中、彼らはどうにかそこに踏みとどまって生きている。

読んでも読んでも希望が見つからず、どうか最後には幸せになってくれないだろうかと思わずにはいられません。そして、過酷な環境で彼らがそれぞれ支えとなるものを見つけ、精一杯考え、戦い、強くなっていく姿からどんどん目が離せなくなります。ラストに明かされる事実にもきつと衝撃を受けることでしょう。

いざ、長編 (分厚い1冊 746 ページ) *

913.6-マ 『とっぴんぱらりの風太郎』 万城目 学 || 著 文藝春秋

伊賀で忍びとして修業を積んでいた風太郎(ふうたろう)は、災難ばかり運んでくる仲間の黒弓に巻き込まれ、里を追い出されてしまう。そのまま、都へ上り、何をしてもなくその日暮らしをする風太郎だったが、いつだって何かに巻き込まれる宿命なのか、その身の回りにはいつだって事件が起こる。ひょうたんから現れる因心居士なる者に振り回され、黒弓や腐れ縁の忍び仲間のとばっちりを受け、何度も命の危機に瀕する運のなさ、それでも生き延びる運の強さを持つ風太郎。その人生は、豊臣から徳川へ天下が移り変わろうとしている時代の境目で大きく揺れ動く。ラストは風太郎とその仲間たちそれぞれが見つけた“己の生き方”に心を打たれればなしです。楽しさと、切なさと、人の温かさと、現実の過酷さで胸がいっぱいになる読み応え抜群の1冊です。

いざ、長編 (1～3巻 1,190 ページ) *

B913.6-ム 『ねじまき鳥クロニクル 1～3』 村上 春樹 || 著 新潮社

いなくなってしまった飼猫ワタヤ・ノボルを探すために妻が僕に引き合わせた加納マルタという不思議な能力を持った女性。その加納マルタの「見た目よりはもっと長い話になる」という言葉のとおり、猫を探していた僕の前から今度は妻のクミコが姿を消してしまう。近所のいわくつきの空家の井戸に入ったまま数日間閉じ込められてしまったり、突然、顔に青い痣(あざ)が出来たりと、妻が姿を消した本当の理由を追い求めていくうちに、僕は長く不思議な世界へと巻き込まれていく。そこでは多くの人物が僕の前に現れ、そして、消えていく。この不思議な世界の中で、妻を見つけ、連れ戻すことが出来るのだろうか。どこへ辿り着くか、まったく想像がつかない不思議な世界をあなたも彷徨ってみませんか。各章の名前にも注目です。

いざ、推理*

B913.6-7 『月光ゲーム』 有栖川 有栖 || 著 東京創元社

大学の推理小説研究会に入った有栖川有栖(アリス)は、夏合宿のため矢吹山のキャンプ場に来てきた。そこで他大学のサークルと出会い、最終的には4つの団体がひとつとなり、総勢17名の若者たちは賑やかにキャンプを行うことになった。楽しい時間はあっという間で、2泊3日の合宿だったアリスたちは予定を変更し、1日下山を遅らせることにした。しかし、その後、彼らには度重なる悲劇が待っていた…。メンバーのひとり、小百合がメモを残したまま消えたのだ。小百合を探している最中、今度は矢吹山が噴火し、登山道が塞がれてしまう。キャンプ場に閉じ込められた彼らを次に襲ったのは、仲間の死だった。現場に残されたのは「Y」の文字。噴火が続く極限状況の中、犯人を見つけることはできるのだろうか。そして、無事下山することはできるのだろうか。

いざ、推理*

913.6-ナ 『さよならドビュッシー』 中山 七里 || 著 宝島社

仲の良い従姉妹 遥とルシアは、祖父の家へ泊まった夜、火事に見舞われてしまう。そして、全身に火傷を負いながら、ひとり生き残った遥。従姉妹と祖父を失ったショックと、思いどおりにならない上に激痛の走る体。生きることを何度も悲観しながらも、遥はつらいリハビリを乗り切り、入学の決まっていた音楽科の高校へ通い始める。ピアノを弾くための指も以前のように動かなくなっていたが、岬洋介というピアノ教師の魔法のようなレッスンで驚きの回復を見せ、コンクールへの出場が決まる。ピアノに専念したい遥だが、クラスメイトからの執拗な嫌がらせや遥の命を狙った不審な事故、母親を巻き込んだ事件が立て続けに起こる。果たして無事コンクールの日を迎えることができるのだろうか。ピアノの美しい旋律と共に、衝撃のラストがみなさんを待っています。

いざ、推理*

B933.6-7 『牧師館の殺人』 アガサ・クリスティー || 著 早川書房

レナード・クレメントが牧師をつとめる牧師館で殺人事件が起こった。殺されたのは村の治安判事を務めるルアリス・プロズロウ大佐。犯人はすぐに自首し、事件は難なく解決と思われたが、その後、他にも犯人が名乗りをあげ、さらにはその両人ともが犯人ではなかったことが判明する。プロズロウ大佐は決して好人物とは言えない人柄だったため、なかなか容疑者が絞れず、捜査は難航する。真犯人は一体誰なのか。詮索好きな村の老婦人ミス・マープルがその真相に迫る。

アガサ・クリスティー作ミス・マープルシリーズの記念すべき第一弾刊行作です。彼女の活躍はこの事件から始まったのです。さて、ミス・マープルはこの事件の真犯人を見事見破ることができるのでしょうか。その鋭い観察眼に注目です。

いざ、ノンフィクション*

782-サ 『夢を跳ぶ』 佐藤 真海 || 著 岩波書店

運動が大好きで、病気とは無縁の生活を送っていた佐藤真海さん。大学でチアリーダーとして毎日が充実していた19歳の時、大切な右足に骨肉腫が発見される。目の前が真っ暗になった佐藤さんだったが、「義足でもスポーツができる」という言葉に病気に立ち向かう決心をする。

抗がん剤治療、手術、術後の幻肢痛、リハビリと辛く過酷な時期を乗り切り、ようやく大学へ戻れたが、そこでは友人たちと自分を比べ、生きていく意味を考えてしまう。しかし、障害者総合スポーツクラブで体を動かすことの喜びを再び感じ、そこで幅跳びと出会う。勝負に挑む楽しさ、記録を伸ばす楽しさを見つけ パラリンピックを目指したいと大きく夢は膨らんでいく。

困難から立ち上がり、夢へ向かって前向きに進む佐藤さんの挑戦から勇気をもらえます。

いざ、ノンフィクション*

914.6-ヤ 『医者をめざす君へ』 山田 倫太郎 || 著 東洋経済新報社

心臓に先天性の障害を持つ14歳の山田倫太郎くん。この本には『お兄ちゃんの病気をなおすお医者さんになりたい』と大きな目標を持ってくれた小さな弟のために、彼が自らの体験を元に記した『患者が望む理想の医者』の8条が書かれています。

『医者への何気ない一言でも、患者さんにとってはとても影響力があるのだ。勇気づけることもできるし、傷つけてしまうこともある。』と、8条にはこの言葉のように誰もが病院で感じたことのある思いが綴られています。『医者をめざす君へ』と書名にはありますが、そうでない人の心にも刻みたいと思える言葉がたくさんありました。健康に暮らせるありがたさや命の尊さを改めて感じさせられる本でもあります。ひとつひとつの言葉を大切に読んでみてください。

いざ、ノンフィクション*

956-ス 『生きながら火に焼かれて』 スアド || 著 ソニー・マガジズ

女の子には学校に通う権利はありません。そもそも、権利と呼べるものなど何ひとつないのです。奴隷のように働き、親の決めた相手と結婚し、息子を生む。女の子しか生めない捨てられます。結婚前に男性と話をするだけで、「シャムルータ」悪い女とみなされ、「名誉」を汚された家族はその娘を処分し「名誉」を挽回しないと村にはいられなくなります。両親の決定により、義理の兄に頭から火をつけられた少女・スアドは、危篤状態で病院に収容されたものの、治療を施されることもなくただ死を待っていました。たまたまヨーロッパの福祉団体により救出され、生き延び、この本を書いたのです。彼女はヨルダンのちいさな村に住むイスラム教徒でしたが、このような「名誉殺人」の犠牲者は現在でもパキスタンやバングラディシュなどにいるのです。その現実を知ってください。

🍡 「今月はこの本を読みました」特別編 🍡

今月は特別編として、なんとスペシャルゲストをお招きして、今月読んだ本を紹介していただきました！！ご協力してくださった長野先生、丸山先生、結城先生、迫先生ありがとうございました。

『羊と鋼の森』（913.6-ミ 宮下奈都 Ⅱ 著 文藝春秋）を読みました。

ふたごの姉の和音の静謐なピアノの音は、駆け出しの調律師の外村の耳に鳥肌を立てた。ふとしたことからこの世界に入った外村は、どうしたら調律が上手くできるようになるのか、どんな調律師を目指せばいいのか迷っていた。未熟な技術で失敗をし、先輩に教を乞い、お客に励まされたりクレームをつけられたりする中で外村は少しずつ成長していく。

ふたごの妹の由仁が原因不明の病気でピアノが弾けなくなる。和音はその動揺から立ち直り、ピアニストを目指す決意をする。外村は和音のピアノの支えとなるために、自分に何ができるか、和音の音を生かすためにはどんな調律をすべきかを考えていた。

先輩の結婚披露宴で和音がピアノを弾くことになり、当日の朝、外村は万全の調律を施した。その直後、予想外の事態が……。

明るく静かに澄んで懐かしい音。甘えているようできびしく深いものを湛えている音。夢のように美しいが現実のようにたしかな音。そんな音が聞こえてくる作品だ。 【長野先生】

『謎のアジア納豆―そして帰ってきた〈日本納豆〉―』（383-タ 高野秀行 Ⅱ 著 新潮社）を読みました。

納豆は日本の食べ物だと思っているあなた。納豆と言えば、水戸を思い浮かべるあなた。納豆は糸を引くものと思っているあなた。納豆菌は藁(わら)だけについていると信じているあなた。実はそうではない事実がこの本には満載なのです。

著者は、これまでもアフリカ、ソマリアのドキュメント『謎の独立国家 ソマリランド』・『恋するソマリア』を推薦本で紹介した高野秀行さんです。今回は「納豆」をテーマにアジアや日本国内を旅したレポートです。本書は、何と、「日本は納豆後進国なのか？」から始まり、「納豆は外国のソウルフードだった!？」と続く。いきなり衝撃的なアプローチ。読み進めば進むほど新たな事実が……。アジア納豆は、森林性の山岳地帯やその盆地に住む少数民族の「辺境食」だった。そして日本も秋田県の間部が日本納豆の起源？ 縄文人も納豆を食べていた!？ぜひあなたも納豆の奥深い世界を旅してください。 【丸山壽先生】

『ロボット・イン・ザ・ガーデン』（B933-イ デボラ・インストール Ⅱ 著 小学館）を読みました。

ロボット物の小説といえば、男性作家による専門用語がつつら書き並べられたとつきにくい本、または戦闘を目的に書かれているというイメージがあります。良い意味でその思い込みを裏切ってくれたのが、この本でした。ある日突然現れた古いけれど特別なつくりのロボット・タング。ベンは仕方なく保護しますが、タングの致命的な故障を発見し、直すために製作者を探す旅へと一緒に出ます。イギリスの南部の村を出発しアメリカのサンフランシスコ、ヒューストン、日本を経てさらにその先へ。タングには学習能力があるら

しく、最初はぜんぜん言うことを聞けなかったのに、だんだんコミュニケーションも成立するようになります。そうなるともう、タングの可愛らしさに登場人物も私もメロメロです。タングに接する日本人の様子は、私たちにありがちな風景に感じられるのですが、イギリス人から見ると特異に見えるようです。けれど、作者自身が後書きに、自分のよちよち歩きの息子の言動をタングに当てはめたと述べているので、むしろ私たちのほうが正解かもしれません。今までこのジャンルを食わず嫌いしていた人に、お勧めです。【鈴木】

『雨天炎天 ―ギリシャ・トルコ辺境紀行―』（B915.6-ム 村上春樹 Ⅱ 著 新潮社）を読みました。

鎌倉にある東慶寺は明治時代まで男子が入れない女子だけの寺でした。絶対入るなよといわれると余計に中がどうなってるのか気になってしまうものですが、世界にはそんな謎に包まれた〇〇禁制といった場所がちらほらあります。(女子高も男子にとっては未知の世界です)

さて、本書は作家の村上春樹さんがギリシャ・トルコを旅した記録です。そしてそこに登場するギリシャ・アトス半島はなんと二千年前から女子禁制の島！僕は残念ながら男子なので行こうと思えば行けてしまいますけど、皆さんはよっぽどのことがない限り縁のない場所でしょう。動物ですら男(雄)しかいないって、一体どんな島なのか。この本を読めば村上さん視点を通して覗き見することができます。

ところで、僕は嫌なことがあると、ふて寝するか旅に出たくなるタイプです。先日も群馬辺りを一人旅してきました。それはリアルワールド(現実世界)からの逃避なわけですが、人気店のパフェを食べに行ったり、カラオケ屋に歌いに行ったりするのも、ちょっとした非日常の体験という意味では同じです。最近気づいたのはわざわざ旅に出なくても本を読めば気軽に、しかも安上がりで trip できるということ。この本を開いて、果てしなく遠い国へ赴き、スタヴロニキタの森を歩き、チャイハネでチャイを味わうのも、なかなか良い旅です。 【結城先生】

『ねにもつタイプ』（B914.6-サ 岸本佐知子 Ⅱ 著 筑摩書房）を読みました。

「読書の秋」というものの、なんだか今年は秋を飛ばして冬がきてしまったようで落ち着かず、体調も崩れがち。コンビニの温かそうな中華まんにも早くも手が伸びてしまう。うまい。

さて、国語科の教員がなにか読み物を推薦しようというのだから、多少は「国語科らしい」方がいいだろうと思いい、高橋源一郎の『13 日間で「名文」が書けるようになる方法』(名著です)や佐藤信夫の『レトリック感覚』(名著です)などを読み返してみた。どれも素晴らしい本ではあるのだけれど、やはりその時の気候や体調との兼ね合いというのは案外大切で、風邪気味の今はちょっと…という気がしてしまう。

そんな折、表題のエッセイ集が目にとまり、手に取ってみた。エッセイというか、この本は筆者の日常と昔話と妄想がほとんど境目なく入り混じったかなり独特な世界観を持っていて、心地よいリズム感があり、そして何よりとてもユーモラス。恐らく筆者＝岸本さんの性格はかなり暗いし湿っぽいんだけど、読んでるとむしろポジティブな気持ちになってくるから不思議。以下に一部引用するのでピンときた方、お疲れの方、手に取ってみては。

「私の通った幼稚園には、幅二十センチほどの帯状の地獄があった。それは「お弁当室」と呼ばれる部屋の戸口の床の、なぜかそこだけタイルの色が変わっている部分のことで、そこを踏むと地獄に落ちると言われていた。」

【迫先生】